生活リテラシー
literacy
自分流の豊かさを見つける才能。

企画監修／積水ハウス株式会社 総合住宅研究所

＃33 人生100年時代の住まい

私たちが目指す〝幸せ住まい〟とは？

gm誌「生活リテラシー」の掲載は今号で第33回目、2008年のスタートから10年以上の長寿連載です。

この誌面で皆さまにお届けしているさまざまな情報の礎になっているのが、積水ハウス・総合住宅研究所での研究成果。

長年にわたってリアルな暮らしの姿を見つめ続け、多角度からの生活研究で得たノウハウを発信しています。

そして、今後もさらに研究を深化させ、有益な情報を発信すべく、

2018年8月に総合住宅研究所内に『住生活研究所』が設立されました。

企業では日本初の〝幸せな住まいを研究する研究所〟として、すでに新たな一歩を踏み出しています。

そこで今号では、新生『住生活研究所』が取り組む

〝人生100年時代の幸せ住まい〟についてその一端をご紹介しましょう。

目指すのは「住めば住むほど幸せ住まい」。

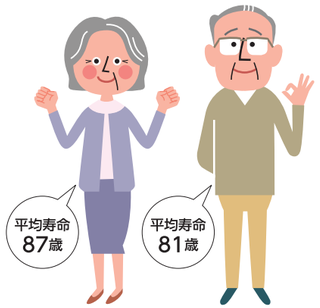
今や日本人の平均寿命は、男性81・09歳女性87・26歳（2017年簡易生命表／厚生労働省）。2007年生まれの日本の子どもは107歳まで生きる可能性が50%あるという研究報告もあり、まさに〝人生100年時代〟が訪れようとしています。

100歳まで生きることが当たり前の時代になれば、人生設計は大きく変わり、生活の器・住まいの在り方もずいぶんと違ってくることでしょう。住生活研究所では、そんな人や社会の変化を見据えた住まいづくりはどうあるべきか、これまでの研究成果を活かしながら「住めば住むほど幸せ住まい」の追求に取り組みはじめています。

実は、この研究テーマ「住めば住むほど幸せ住まい」には大きな2つの思いが込められています。1つは〝時間軸で住まいを見渡す（＝住めば住むほど）〟ということ。もう1つは〝住まいによって幸せを創造する（＝幸せ住まい）〟という思いです。

それではまず、「幸せ住まい」の研究についてご紹介していきましょう。

■人生100年時代の到来?!



■住生活研究所のメインテーマ

住めば住むほど幸せ住まい

時間軸で見渡す　幸せを創造、提供する

もっと住まいの〝無形価値〟を高めていく。

「幸せ住まい」研究は、従来の取り組みと何が違うのでしょうか。これまでは住まいの「安全・安心」「快適性」「機能性」などを中心にした研究開発でしたが、これらに新しいテーマを加えて、より幅広く〝幸せ〟を創造していくのが「幸せ住まい」研究です。

心身の「すこやかさ」、家族や友人との「つながり」、「私らしさ」や「生きがい」など、いわば〝無形の価値〟を住まいによって提供することを目指しています。誰の目にも見える確かな価値だけでなく、住まい手それぞれによって異なり、必ずしも形として見えない価値も備えあわせてこそ、本当の「幸せ住まい」が実現すると考えています。

■「幸せ住まい」研究の枠組み

基盤となるテーマ		新たな取り組みテーマ
安全・安心	＋	すこやか
快適性		つながり
環境配慮		私らしさ
機能性		生きがい
効率性		楽しさ
		役立ち

〝ふだんの暮らし〟にこそ、「幸せ」がある。

ところで「幸せ住まい」と聞いて、どのようなシーンを思い浮かべるでしょうか。たとえば、手間のかかることは全自動でこなし、家事はすべてロボットにまかせて、家族はのんびりと休養三昧…。そんな未来的（？）な暮らしも幸せの1つかもしれません。ただ、何もかもオートメーションになりすぎると、日々の暮らしの歓び自体を手放してしまうことにもなるのではないでしょうか。

夫婦や親子で一緒にいろんな作業を手伝いあったり、互いに感謝しあいながら暮らすことで、幸せの実感は大きく膨らむものです。だから住まいは、なにげない毎日の暮らしの歓びを感じられるようにすることが肝心なのです。

面倒だと感じていた作業を楽しみに変える仕掛け、小さな歓びを積み重ねていくことができる住まい、ふだんの暮らしの充実こそ本当の幸せにつながるといえるでしょう。

家族一緒に楽しみながらする作業は、
幸せを実感できる大切な時間！

まず〝家事（いえごと）〟に着目！

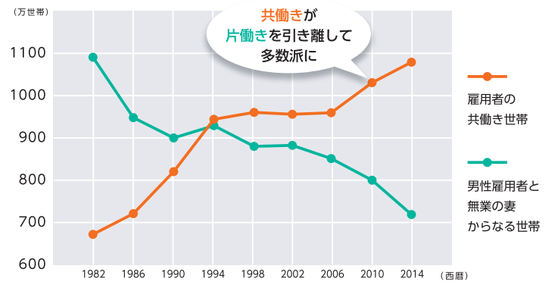
ふだんの暮らしの充実を考える上で、まず着目すべきは家事です。家事といえば炊事・洗濯・掃除などをイメージしがちですが、もう少し幅広く〝家事＝いえごと〟と捉えることが肝心。たとえば、わが家のメンテナンスや日曜大工、家族アルバムの整理や季節イベントの計画なども含めます。

そして、この〝いえごと〟という呼び方には、これまでの家事をもっとポジティブに捉えて〝幸せ〟につなげようという思いがあり、「家のいろんな事」「家族みんなでする事」という意味を持っているのです。

共働き家族が増え続ける現在、〝家事は夫婦や家族で協力しあって行なうこと〟という意識が当たり前。だからこそ、家族の誰もが家事をしやすく、一緒に楽しくできる住まいが必要であり、〝幸せ住まい〟への第一歩にもなるのです。

それでは研究成果を活かした具体的な工夫や提案をご紹介しましょう。

■共働き世帯数の推移　＊出典：男女共同参画白書（平成27年度版）内閣府



ご存知ですか？ 収納の〝14％の壁〟

最初は、誰もが悩む収納です。実は収納には〝14％の壁〟というものがあります。この数字は住まいの延床面積と収納面積の割合ですが、収納スペースが14％以上に広くなっても満足度は高まりにくいことを示しています。収納スペースは広い方が良いと考えがちですが、一概にそうとは限らないのです。

さらに調査を進めてわかったのが、モノがあふれて困っている空間が「リビング」ということ。暮らしを思い浮かべれば、確かに片付けに追われているのはリビングではないでしょうか。雑多なモノが多いのに、収納できる場所が少ない。それがリビングの実態です。

そこで提案しているのが「リビングクローク」です。リビングに小さな納戸を設ける提案ですが、雑誌や子どものオモチャ、掃除道具や近くに置いておきたい書類など、多種多様なモノをサッとしまえ、すっきりとしたリビングが保ちやすくなります。

■収納は広さだけでは解決しません

＊積水ハウス調べ

リビングに散らかりがちなモノをまとめて
すっきり収納できるリビングクローク。

家族一緒に作業しやすい〝セパレートキッチン〟

下ごしらえから後片付けまで、さまざまな行為が発生するのが調理作業です。家族が協力しやすく、一緒に作業するのが楽しみにもなる家事のひとつですよね。

この調理の動線を研究してわかったのが、家族が一緒に作業するには〝適度に分散させた作業スペースが大切〟ということ。コンロやシンクのまわりに複数の作業台を設けていろんなことを並行してできるようにするのが、家族みんなで協力しやすいキッチンづくりの秘訣になります。

そして、この研究成果を活かしたのが「セパレートキッチン」です。コンロとシンクを背中合わせのカウンターに分け、その周囲に作業台を確保。ママがサラダを準備する後ろでパパがシチューを煮て、子どもたちは盛りつけや食器の用意をお手伝い…。そんなシーンがスムーズに実現できるようになります。

コンロとシンクの場所を分け、
それぞれの周囲に作業台を設けたセパレートキッチン。

効率の良いキッチンレイアウトを検証するために
積み重ねた複数調理の実験シーン。

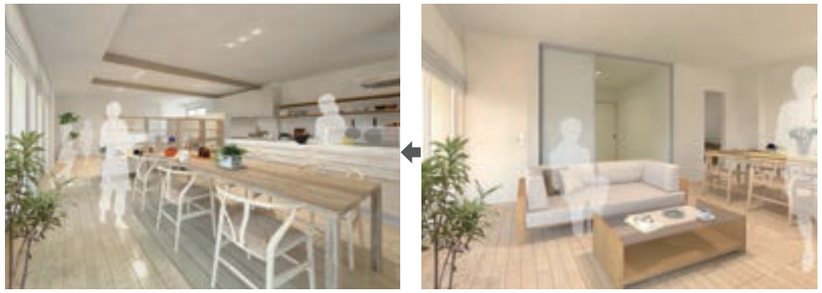
家族で過ごす心地よさを高める〝ファミリースイート〟

「幸せ住まい」の研究は、家事ばかりに着目しているわけではありません。住まいの中心・リビングの心地よさを高める工夫にも積極的に取り組んでいます。

リビングでイメージするシーンの代表が〝家族のだんらん〟ですよね。でも、その〝だんらん〟にも家族によって様々な過ごし方があります。リビングの心地よさを追求するために家族のシーンを細かく見つめることからスタートし、その結果として得たのが〝一緒に居る≠一緒にする〟ということ。家族がリビングに一緒に居ても必ずしも同じことをしていない、一緒に居ながら別々のことをしているケースも少なくない、ということがわかってきました。

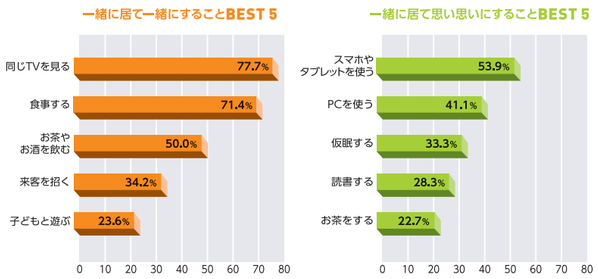
この生活実態を見据えてリビングの空間性を考えたのが「ファミリースイート」です。従来のＬＤＫの考え方を脱し、仕切りがない広々とした大空間リビングにすることで、一緒に居ながら思い思いのスタイルでくつろげるのが特徴。家族のゆるやかなつながりを感じながら、心地よいだんらんの時間が過せます。

また、広々とした空間ならではのプラスαの生活シーンも実現可能。リビング内に趣味コーナーを設けたり、ヨガやストレッチなどを伸び伸びと楽しむという暮らしもかなえます。



従来のLDK（右）を仕切りのないファミリースイート（左）にすると、空間が広々として多彩な生活シーンが実現しやすくなります。

■リビングは家族が“一緒”に居ながら“それぞれ”ですることも多い場所



＊リビングルームアンケート調査／住生活研究所調べ（2018年 n=898）

時間軸でも〝幸せ〟を捉える！

最初にお話しした研究のメインテーマ「住めば住むほど幸せ住まい」を覚えているでしょうか。そこに込めたもう1つの思い〝時間軸で住まいを見渡す（＝住めば住むほど）〟について、最後にお伝えします。

この思いは、わが家づくりの実現や新居を入手したときだけが〝幸せ住まい〟の頂点ではないということ。それまでのプロセスにも〝幸せ〟を感じ、そして住みはじめてから何年経っても〝幸せ〟を感じ続けられることが大切なのです。

■時間軸で考える「住めば住むほど幸せ住まい」

たとえば、わが家が欲しいと思う瞬間や夢を育てていくときの幸福感を高めたり、日々の生活の中で新たな歓びに出会えたり、ライフスタイルが変わってリフォームするときにも住まいが持つ価値を感じる…。そんな生涯を通して〝幸せ〟の実感が続くようにしたい。これが私たちの研究の姿勢です。

新たな取り組みはスタートしたばかりですが、その成果はこれからもgm誌「生活リテラシー」で発信していきますので、ぜひご期待ください。

継続と積み重ねが、“幸せ”につながる！

住生活研究所 所長　河崎由美子

「幸せ住まい」は、私が入社以来30年以上に渡って携わってきた生活研究の延長線上にあるものです。どのように暮らしているか（暮らしたいか）を細かく見つめることが、理想の「幸せ住まい」につながると考え、日々研究を続けています。

生活というフィールドは非常に幅広く、すぐに成果の出ることばかりではありません。継続と積み重ねが“幸せ”を導く。これは普段の暮らしにも通じることだと、私自身プライベートで家事・子育てに取り組んできて、今あらためてそう感じています。